

「蜷川実花展 ー虚構と現実の間にー」関連イベント

サマー・プレミアムナイトツアー

日時 2018年8月10日(金) 19:30-21:00

場所 熊本市現代美術館 ホームギャラリー

講師 富澤治子(熊本市現代美術館学芸事業班主査・学芸員)



「蜷川実花展 ー虚構と現実の間にー」会場入口

蜷川実花展 ー虚構と現実の間にー

会期 2018年6月30日(土)-9月9日(日)

会場 熊本市現代美術館 ギャラリーI・II

ただいまより「蜷川実花展—虚構と現実の間に—」関連イベント「サマー・プレミアムナイトツアー」を開催します。どうぞ宜しくお願い致します。

本日は、まず30分ほど鑑賞のヒントとなるようなレクチャーをして、それから展覧会場を作品解説しながら巡るというスケジュールを進めたいと思います。

はじめに、蜷川実花さんと熊本市現代美術館の出会いについてお話ししたいと思います。蜷川実花さんが当館で初めて作品を展示したのは、「花・風景」展(2009)です。当時のご本人写真です。(fig.1) ご自身のブランドの洋服を着用されています。



fig. 1 「花・風景」展(2009)プレス発表時の蜷川実花



fig. 2 「花・風景」展(2009)展示風景

当時の会場風景写真です。(fig.2) インスタレーションを1点、それと、新作の写真作品群を展示しました。インスタレーションの入口周辺の床に散りばめてあるのは、フィルムサイズの小さい立方体のアクリル製の写真作品です。この頃はまだフィルムが主流の時代だったので、そのサイズ感が反映されています。この小屋型インスタレーションは、天井と四方の壁に蜷川さんの作品が拡大プリントされて壁に貼り込んであり、作品の内側に入り、作品を空間的に体感・没入させるもので、プリント技術も今に比べれば発展途上、空間サイズもそう大きくない、天井高も3mあるか無いか位のものでしたが、当時はかなり先進的な表現でした。この頃はまだLEDが、今のように廉価でなく普及もしていませんので、インスタレーション内の照明の確保は本当に大変でした。天井に使うような横長の蛍光灯を床置きに壁に沿わせて、明るい空間にしました。たかだか約10年前なのですが、展示に用いられる機材や技術は刻々と変化しているのが分かります。そしてまだ、SNSを通じて個人が発信する時代では無かったので、この会場内は撮影禁止でした。そこにも時代の変化が認められます。

さて、この時に展示された新作は《FLOWER ADDICT》シリーズでした。その後、この展覧会を記念する作品として当館で購入し、作家からのご寄贈とあわせて4点を所蔵しております。関連企

画として、8月下旬より当館の井手宣通ギャラリーでの所蔵作品展に展示しますのでぜひご覧ください、入場無料です。

さて、本展は、蜷川さんの熊本県下で初の個展です。この展覧会は全国巡回を予定しておりますが、熊本が立ち上がり会場で、内容としても国内最大級の規模での開催です。展覧会場のサイズについて言うと、当館は1500㎡ですが、他の会場は大概1000～1200㎡程度が通常ですので、もしかすると1～3ゾーン減るのかもしれませんが。となると、一番見応えがあるのは当館かもしれません。立ち上がりということで、蜷川さんの気持ちも強く入った会場になりました。



fig. 3

この写真は、開会式の前に、プレス用に本人写真を《桜》のゾーンで撮影したものです。(fig.3) 今回も、もちろん着ているお洋服は、ご自身のブランドで、桜の写真をプリントしている布を部分的に用いたドレスで会場にぴったりです。一層凝ったデザインになっているのもポイントです。

先ほどお話したように、SNSを通じて個人が発信する時代が到来しておりますので、本展の会場も撮影OKの作品・場所があります。こちらの《桜》は、会場入ってすぐのインスタレーションで、来館者の方をいきなり圧倒します。(fig.4) そしてその感動のままにSNS発信して頂くことを意識した空間になっています。



fig. 4 「蜷川実花展—虚構と現実の間に—」会場入口



fig. 5 《桜》展示風景

《桜》の全体はこのような感じですよ。(fig.5) 先ほど見て頂いた2009年のインスタレーションから進化しているのが分かります、プリント技術が格段に発達したこともありますし、蜷川さんの展示

方法も変化しています。

先ほどの2009年の展示の時には無かったのが、この「イメージonイメージ」の方法です。蜷川さんの《桜》の作品が、壁のサイズに大きく引き延ばされて、その壁面に額装された同シリーズの作品群を展示しています。私の見解から言いますと、蜷川さんが写真作品のみならず、たくさんの映像作品を世に出すようになったことから発生した展示方法と思います。映像表現に由来するような効果／エフェクトが、蜷川さんの写真表現にも滲みだしているような印象です。映像がダブる、イメージが重なるような重層的な表現が、「写真」のルールの中で行われるとこういう表現になり、そして、こういう表現をするのは蜷川さんしかいません。そういう意味で、「イメージonイメージ」は、とてもいまの蜷川さんらしい展示方法です。

本日ご来場頂いている方で、6月30日に開催されたアーティストトークに当選・参加された方は、その時の話と少々ダブってしまいますがご了承ください。アーティストトークには、蜷川さんの「いま」と「考え方」が色濃く表れていましたので、展覧会場での鑑賞の前に、当日のお話のいくつかを是非ご紹介したいと思います。

アーティストトークは、ここホームギャラリーにて開催し、抽選に当選した160名が参加されました。抽選応募に合わせて「蜷川さんへの質問」を募集しました。そこから22の質問を私が選び、蜷川さんに事前にお伝えしました。蜷川さんもお忙しいなか色々考えてきてくださったため、とても内容の濃いトークとなりました。

まず、蜷川さんのご実家に飾られていた作品についてご紹介しましょう。蜷川さんのお話では、ご実家には四谷シモンや辻村寿三郎の作品が飾られていて、幼少期には「なんでこのお人形は裸なんだろう？」と不思議に思っていたとのことでした。四谷シモンさんも、辻村寿三郎さんも、日本の60年代から80年代の時代精神を象徴する重要な人形作家です。これらの作品が蜷川さんの身近な日常にあって、リカちゃん人形と同じく人形として存在していたとお話されていました。

四谷シモンや辻村寿三郎の人形が放つアンダーグラウンドな感じや生々しさ、前衛的で刺激的な表現が、当時の女の子のほとんどが持っていた可愛いリカちゃん人形と一緒に日常的に溶け込んで存在している状態、それは蜷川さんのいまの作品世界と表現にも通じるところがあると思います。

あわせて発言された「横尾忠則さんの作品も実家にあります」を考えてみましょう。当館は横尾さんのポスター作品も数多く所蔵していますため、ここでは参考までに最も有名なポスターのひとつ《Tadanori Yokoo》(1965)を紹介します。横尾さんは、蜷川さんが尊敬する作家のひとりです。浮世絵的な色彩・表現をグラフィックの表現に初めて取り入れた点など斬新な発想の作品で1960年代からずっと高く評価されており、現在も雑誌の表紙を飾るような「時代の寵児」として活躍されています。

また、蜷川さんは自身の作品の色彩について、「メキシコ的な色味にルーツがあると思っていたが、客観的に分析してみて、着物の色や浮世絵のカラフルさに似ていると思った」と語っていました。

スライドでいくつか蜷川さんの写真作品を紹介します。こちらの二点は彼女がメキシコで取材した初期の作品群《BABY BLUE SKY》からです。鮮やかな青空、白い砂、強いオレンジ色が印象的です。



fig. 6 《INTO FICTION/REALITY》展示風景 *《noir》からの抜粋が含まれる

こちらは近作《noir》より金魚の作品で、背景の色はまさに着物に用いるような群青、金魚の赤と白と、色味、配色、平面的な構図は確かに日本的です。またこの《花》は、真上からのフレームいっぱいのアップの構図で、中心から放射状に広がる花びらが平面的に表現されます。先ほどの横尾さんのポスター《Tadanori Yokoo》の太陽光線の放射線の表現と、そう遠くない印象ですね。このように、蜷川さんの作品の色彩や平面的な表現は、横尾さんそして浮世絵的な表現からの影響が少なからず見受けられます。

他方で、この「メキシコ的」というのは、蜷川さんの作品理解の重要なキーワードです。《BABY BLUE SKY》などメキシコで取材した作品があることもそうですが、今回のアーティストトークでも、「中学生の時に、親と観た映画で「サンタ・サングレ」(1989)と「エル・トポ」(1970)という映画があつて…」とあり、当日、私とその映画を観てなかったのでいまいち反応出来なかったことを反省し、追っかけて鑑賞した所感をここで述べたいと思います。

アレハンドロ・ホドロフスキー監督はチリ出身のカルト映画の巨匠で、「エル・トポ」は彼の代表作、両作品ともメキシコが舞台です。本当にアンダーグラウンドの香りが濃厚で、様々な要素がてんこ盛りです。歪んだ家族関係・愛情表現、猥雑さ、大げさな馬鹿馬鹿しさ、さらには、濃厚なメランコリック、耽美、スプラッタ、フリークスなどが、目一杯作品に埋め込まれていて、そこに、メキシコ的な派手な服装、メキシコ的な派手でセクシーなダンス、メキシコ的な死生観が、ちりばめられています。

「サンタ・サングレ」や「エル・トポ」が、蜷川さんのいまのトークに出てきた事を考えると、これらの要素が、まさに今、編集されている新作映画「Diner ダイナー」(2019)に、もしや影響している

のかもと深読み出来るのではないかと思います。

続いて、「バイブル的な一冊はありますか？」という質問には、藤原新也さんの写真集『メメント・モリ』が紹介されました。小学校の高学年か中学校一年生位に父親からプレゼントされたということでした。この作品集は、今も入手できるので是非見て頂きたいと思います。蜷川さんに少なからずの影響を与えたことが垣間見えます。

ひとつは「造花の供花」です。『メメント・モリ』から紹介しますと、これは青森の恐山にある子供の供養塔だと思うんですが、生花はすぐ枯れてしまうので造花の供花、人工の枯れない花の明るい色彩の目立ち方がすごいですね。

今回の展覧会には、《永遠の花》という花を特集したゾーンがあります。(fig.7) 蜷川さんが花を撮影する元々のきっかけはと言いますと、メキシコ等の暑い国の墓地で、死者への手向けの造花に出会い、青空の下でクラクラしながら撮影したことですので、蜷川さんの「花のイメージ」は、死者との距離が近いことを改めて言及しておきましょう。



fig. 7 《永遠の花》展示風景

また、生と死の距離の近さについても『メメント・モリ』からの影響がみられます。ここではショックが軽めの作品を紹介しますが、これはガンジス河のほとりの白骨死体で人骨が転がっています。これらを小学校六年生、中学校一年生の頃に見て、強烈な刺激を受け、どのように自分は生と死を撮影するのだらうと考えられたのではないのでしょうか。本展の見どころのひとつ、蜷川幸雄さんの死を見つめた《うつくしい日々》シリーズに、その答えがひとつ出ています。

さて、いよいよ会場に行く前に、蜷川さんらしい作品の最も華やかなテーマ、セレブ達のポートレート、《Portrait of the Time》のゾーンについて、その見どころをご紹介します。このゾーンは約200点出品されていますが、その多くは雑誌『AERA』の表紙を飾ったポートレートです。

蜷川さん曰く、ポートレートには4つの撮影方法のパターンがあるそうです。

- ・その人に合いそうなバック(その人のイメージを大事にして作った空間)
- ・その人のイメージに合わせて、一番良い風に(仕上げた空間)
- ・その人のイメージを、あえて外す
- ・何もしない(そのままで大丈夫なので、何にもしない)

1～2週間前に「この人の撮影をお願いします」と、依頼がきた時にどういう風にしようかと考えてこの4つのパターンから構想を練るとのことでした。

蜷川さんご紹介された2つの例のうち、ひとつは瀬戸内寂聴さんです。カタログにも掲載されています。どういう風に作品を撮ろうかなと考え、「ピンクの背景が良いかしら?」と思い付いたそうです。「その人に合いそうなバック」のパターンです。作品を見ると、ピンクのスクリーンというかシートを背景に用意した、とてもシンプルな空間で撮影されています。

もう一つは羽生結弦選手。こちらもカタログに掲載されています。これは「その人のイメージに合わせて、一番良い風に」のパターンです。このトークはすごく面白かったので、少々引用しますと、「絶対、みんなが見たいものを撮る」と思って、「蜷川、良くやった!」と、歓声が聞こえるイメージで撮影しました」とのことでした。

この作品は、羽生選手が持つ王子様的な雰囲気がありつつも、とても妖艶な感じ、セクシーな感じが出ています。どのポートレートも5分くらいで撮影が行われるそうです。そのスピードには驚いてしまいます。

さて、ここまで事前学習として、《桜》、《永遠の花》、《うつくしい日々》、《Portrait of the Time》について触れました。他のゾーンについては、これから会場をご案内しながら解説したいと思います。ご清聴ありがとうございました。

編集:富澤治子